様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　１日現在

研究種目：　若手スタートアップ
研究期間：2007～2008
課題番号：　19820030
研究課題名（和文）　日露戦争期における視覚イメージ研究
研究課題名（英文）　Research of visual images from the Russo-Japanese war

研究代表者
向後　恵里子（KOGO, Eriko）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手
研究者番号：80454015

研究成果の概要：
本研究は、日露戦争（1904-05）の視覚イメージを、絵画作品や新聞・雑誌等を含む当時の多様なメディアを横断的・包括的に調査し、分析と考察を行うものである。
従来未調査の部分が多く残されていた日露戦争と視覚文化のかかわりについて、基本的な見取図を描くことができた。また、戦争の表象をめぐる多様なあり方が明らかになるにつれ、日露戦争のイメージ形成の道筋が一つではなく多層的になされていること、戦争の推移に連れてその様相が移りかわってゆく様子をとらえることができた。
こうした観察から、日露戦争の視覚イメージが、当時の社会状況と不可分であること、また「文明国」の「国民」を表象する傾向の多いことが明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	860,000	0	860,000
２００８年度	630,000	189,000	819,000
総　計	1,490,000	189,000	1,679,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　哲学－美学・美術史
キーワード：　美術史　芸術諸学　近・現代史　文化史　戦争　表象　メディア

１．研究開始当初の背景

(1)　戦争と文化、美術

現代のさまざまな戦争は、戦場に身を置かない私たちの日常において、報道として、また娯楽として、多様な表象のかたちを取って私たちの眼前にあらわれる。そのあらわれは、まさに一つの文化にほかならない。そうした戦争－文化のかかわりに対する関心から、本研究は出発している。

これは、戦争と文化とを、どちらかがどちらかに優位を持つもの、たとえば戦争によって文化が疲弊するといったように、両者をまじわらないものとして図式化するものではない。むしろ両者の、歴史上のある時点における不可分の結びつきに注意を払い、そこから見えてくるものをとらえようとする姿勢である。

この姿勢は、戦争を、政治や軍事といった従来論じられてきた領域にとどめず、文化という観点からながめることを可能にする。また文化についても、戦争の持つ政治的・社会的な要素を勘案したうえでの再考を促す。こ

の両者の一体となった地平からは、その時代の社会や思想、人々の生、また生きられた現実について、新しい視野がひらけるだろう。

こうした視野から、代表者は次のような疑問を持った。過去、特に日本の近代において、戦争はどのように文化―とりわけ〈美術〉となってたちあらわれたのだろうか。またそれは戦争の展開、〈美術〉の展開とどのようにかかわっているのだろうか。

(2)　日本近代美術史における先行研究

こうした疑問に答える論考は、徐々に増えてきている。日本近代美術史研究もその例外ではなく、1990 年代なかば頃から活発な研究・議論が見られるようになっている。

たとえば、1994 年度の美術史学会では、シンポジウムのテーマに「戦争と美術」が選ばれた。1996 年には、丹尾安典氏・河田明久氏の共著『イメージのなかの戦争 : 日清・日露から冷戦まで』（岩波書店、1996 年）が通史として出版されている。木下直之氏もまた多くの先駆的な論考を発表している（『美術という見世物』1993 年等）。

また、昭和における十五年戦争期の「作戦記録画」を中心とした研究の進展には目覚しいものがある。前述の通史をはじめとした河田明久氏の一連の研究（「15 年戦争と「大構図」の成立」『美術史研究』第 32 冊、1994 年等）は、その代表的なものである。近年には、こうした研究の集大成とも言える『戦争と美術』（国書刊行会、2007 年）が出版された。

戦争画を取り扱う展覧会も開催されるようになっており（神奈川県立近代美術館「描かれた歴史」展、1993 年。姫路市立美術館「美術と戦争」展、2002 年等）、世間における戦争画の歴史に対する認知は広まってきているといってよい。

(3)　日露戦争研究の必要

しかし、こうした研究の進展にもかかわらず、いまだ足りない点を指摘することができる。それは第一に、日露戦争期の研究が不足していることである。これは、ひとり美術史のみの問題ではない。多くの領域でこの問題意識が共有されており、今後のさらなる研究の進展が期待されているのが現状である（『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、2004 年）。

第二に、特定の戦争画や特定の作家群を対象とした論考が多く、複製メディアにおける展開や、無名の作家への論及が少ないことである。これは、美術史が従来得手としてきた作品論・作家論によって、戦争イメージを取り扱う姿勢を意味する。もちろん、こうした研究による蓄積はきわめて重要である。しかし、その背後に、大量の視覚イメージ群を置き去りにしていることにも目を向ける必要があろう。こうした視覚イメージ群を視界におさめ、いわばその地誌を描き出す基礎的調査を行ってはじめて、特定の作品・作家の位置付けや意義が、同時代の状況にそくしてよりはっきりと浮かび上がるのではないだろうか。

(4)　代表者の研究背景

代表者は、学部・大学院を通じて、20 世紀初頭・明治時代後期の日本における大衆的な視覚イメージの歴史を明らかにすることを目的とし、多様なメディアを対象として、同時代の社会的な状況との結びつきを重視しながら研究を進めてきた。なかでも、修士論文では、日露戦争期の最新流行メディアである逓信省記念絵葉書を考察し、当時のメディアの広がりとその視覚イメージのあり方に光を当てることができた。また、研究開始前より助成を受けて進めていた従軍画家東城鉦太郎の研究を通じ、当時の代表的な従軍画家の活動を明らかにしつつあった。東城という一人の画家の活動を中心にすえることで、日露戦争の視覚イメージの全体像を見渡すための、メディアを横断した視野を獲得していた。代表者はいまだ研究の少ない日露戦争期の視覚イメージに対する基礎的調査を手がけており、それを本研究の遂行に活用することが可能であった。

２．研究の目的

(1)　日露戦争と国民意識の形成

日露戦争（1904-05）は、国力の総動員と兵士の大量死という事態を生じさせ、20 世紀的帝国主義戦争の幕を開いた戦争であるとされる（大江志乃夫『日露戦争と日本軍隊』1987 年）。この未曾有の規模の戦争遂行に際し、「国家の一員」であるという国民意識が形成されたことが指摘されている（井口和起『日露戦争の時代』1998 年）。この形成に寄与したと一般に考えられるのが、新聞や雑誌をはじめとした様々なメディアであり（Anderson, Benedict, *Imagined communities : reflections on the origin and spread of nationalism,* London ; New York : Verso, 2006（『想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、1987 年）、その視覚イメージである。

(2)　視覚イメージの展開

日露戦争期には、多くの従軍画家・写真班が活動し、開戦直後から視覚イメージの作成・伝達がはじまった。新聞や画報雑誌、絵葉書といったメディアにおいて、有名無名の作家たちが多くの視覚イメージを作り出している。それらは熱狂をもって迎えられ、メ

ディア自体の流行や発行部数の拡大を呼んだ。こうした大衆的なメディアにおける視覚イメージをまず通じて、日露戦争は人々の前に可視化されたと言える。さらに、時をおかず、戦争画の展覧会が開催されている。絵画作品においてもまた、戦争にまつわるイメージが描き出されていたのである。こうしたイメージのいくつかは、教科書等で繰り返し使用されることにより、今日においてもなお日露戦争のイメージを形成している。

(3)　日露戦争への等閑視

このように、日露戦争の視覚イメージはきわめて多様な展開をみせ、また日露戦争の時期に特徴的に見られる、国家・国民の形成と密接に結びついてゆく点が考えられる。

しかし、１で触れたように、日露戦争期の視覚イメージについては、いまだ基礎的調査が進んでいない。とくに美術史の領域においては、「美術品として後世に伝ふるに足るものはあまり作られなかつた」（石井柏亭『日本絵画三代志』1942 年）といった理解を受け継ぎ、等閑視されがちであった。それはとりもなおさず、20 世紀初頭の美術史研究における社会的視座の不足を示すものである。

(4)　視覚イメージの調査と考察

ゆえに本研究は、日露戦争を描いた視覚イメージを、広範囲のメディアにわたって調査し、その様相を明らかにしたうえで、果たした意義を考察するものである。最終的な目的は、まず第一に 20 世紀初頭の日本における視覚文化のあり方を、戦争という国家的・社会的事象との関係から論じてその歴史を描くこと。第二に、日本近代美術史における未踏査の領域に光を当て、新たな美術史の可能性をさぐる点にある。

こうした包括的なアプローチによって、日露戦争と文化とのかかわりを、美術を含む視覚イメージの展開から論じることが本研究の目標である。

３．研究の方法

(1)　研究の方針

以上の背景をふまえ、本研究では、1904 年の日露戦争開戦から 06 年の凱旋完了までを日露戦争期として設定し、当該期の新聞・雑誌・絵葉書等の複製メディアと絵画作品の双方における視覚イメージを調査した。

調査の対象は、従来知られている著名な作家や作品に限らず、今日では忘れられた作家、および新聞・雑誌・絵葉書等といった散逸しがちなメディアを包含する。また、それらの視覚イメージを生み出すために機能した企業や集団についても目を配り、産業としての構造のあり方にも留意する。

これらの情報を博捜し、基本的なデータを整備した上で、その活動を考察した。

(2)　メディアごとの調査

前述の研究目的を達成するために、以下の方針に従って調査を進めた。この調査とデータベース化は、研究期間を通じて行い、19 年度には主要なものの調査を、20 年度には 19 年度の調査をふまえ、入手困難なメディア・作品を中心に行った。

①　画報雑誌

画報雑誌は、日露戦争時に流行した戦争雑誌の形態である。石版多色刷などを盛り込んだグラフ雑誌で、「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」などと同様に、戦争の視覚的情報伝達に大きな役割を果たした。

調査を行った雑誌の主なものは、画報雑誌を中心として、以下の通りである。

日露戦争実記、日露戦争写真画報(博文館)／軍国画報、帝国画報(富山房)／征露図会、凱旋図会、風俗画報(東陽堂)／日露戦争実記（育英舎）／日露交戦録（春陽堂）／征露戦報、征露写真画帖（実業之日本社）／戦時画報、近事画報、日露戦争外国画集（近事画報社）／征露図会、凱旋図会（東陽堂）／日露戦争実記、戦争文学（育英舎）／日露戦争記、日露戦争写真帖（金港堂）／軍事画報（郁文舎）

②　新聞

代表的な数誌を選んで調査を進めた。参照した主な新聞は以下の通りである。

都新聞／東京朝日新聞／大阪朝日新聞／読売新聞／大阪毎日新聞／国民新聞／東京日日新聞／万朝報

③　絵葉書

絵葉書にかんするカタログ・出版物（『美しき日本の絵葉書展』2004 年等）や、実際の作例を通して概要を調査した。

④　絵画作品とその記録

作品自体がのこっていることが稀であり、多くは『美術新報』をはじめとする当時の美術雑誌や、各画家の記録・作品集を参照することになる。この調査では、失われた絵画作品の情報もあわせて収集し、展覧会の開催記録や出品歴、作品タイトルなどの基本的情報の整理を進めるとともに、特に従軍画家の活動に注目して調査を行った。

(3)　その他の調査事項

①　出版

以上の調査と同時に、メディア自体の発行状況を調査した。また、これら主要なメディア以外にも目配りをし、できるだけ当時の視覚

イメージ群の全体像に接近すべくつとめた。

②　従軍画家と戦争画の制度

従軍画家など、制度的な展開の見られる事項については、防衛省防衛研究所等の公文書を調査した。

(4)　戦争のイメージ形成をめぐる言説

日露戦争に際しては、戦争をいかに描くか、またどのような表象が求められるかといった議論が交わされている。こうした戦争のイメージをめぐる言説についても、同時代の文献を中心に採集し、多様な文脈に配慮しつつ、分析を進めた。

４．研究成果

(1)　研究の主な成果

以上の調査・分析により、従来未調査の部分が多く残されていた日露戦争の視覚イメージの展開について、基本的な見取図を描くことができた。また、戦争の表象をめぐる多様なあり方が明らかになるにつれ、日露戦争のイメージ形成の道筋が一つではなく多層的になされていること、戦争の推移に連れてその様相が移りかわってゆく様子をとらえることができた。

それらの傾向を端的に述べれば、日露戦争は「一等国」としての日本を、内外に向けて――対内的には挙国一致の武装せる「国民」、対外的には近代的な「文明国」として――表象せんとする姿勢が認められる。それにふさわしくないと考えられる、「際物」的なもの、または「絵空事」に対する批難も見受けられた。しかし、こうした批難の存在は、逆に日露戦争の時期にそうした「際物」「絵空事」の視覚イメージの人気が続いていたことを裏付ける。

こうした多様なイメージの氾濫の中で、留意しておきたいのは、「国民」や「文明国」を指向する、いわば「国威発揚」のイメージが、決して〈上〉から押しつけられたプロパガンダに限らないという点である。検閲は日清戦争の時期にくらべて発達していたが、そうした制度以上に、自らの理想を視覚的に造形しようとする意志が確認できる。それはいわば大がかりな祭りのように、人々の間で共有されていた。

もちろん、政府・軍部における情報統制とプロパガンダがまったくなかった訳ではない。陸軍では大本営副官堀内文次郎、海軍では軍令部参謀小笠原長生の存在が、そうした部分を担っていた。彼らは双方とも戦史編纂と情報公開の任務にあたっており、彼らの動向は戦争の相貌を形成する上で重要である。

総じて、戦争という事象を前に、画家をふくめた多くの人々が、いかに制作と受容一生産と消費の双方向から参加し活動したかを観察することができた。これにより、20 世紀初頭の社会において、視覚文化が果たした一つの役割をとらえなおすこととなった。

(2)　メディアごとの成果

①　画報雑誌

『軍国画報』（冨山房）など、多くの画報雑誌は口絵・挿絵を売り物とし、人気をはくした。洋画・日本画の双方にわたって多くの画家たちが手を染めている。また『戦争文学』（育英舎）など、報道性ではなく物語性を重視した雑誌も存在し、多様な戦争のイメージ形成にはたらきかけている。

②　新聞

戦争報道の白熱によって部数を飛躍的に伸ばし、各社がしのぎをけずっていた。大新聞・小新聞を問わず、多くの新聞紙面には挿絵が掲載され、また増えていることが確認できた。

戦死者を中心に、兵士の肖像は多くの新聞で毎号掲載されており、従軍画家の手による「戦地の通信」や、海外の新聞・雑誌からの転載もよく見られる。また写真印刷も徐々に増加している。

③　絵葉書

絵葉書は当時、単なる通信手段をこえて、報道的な性格から記念的な性格までを持つ、新しい視覚メディアとして、19 世紀末からヨーロッパ、とくにドイツを中心に一大ブームとなっていた。

日本でのブームのきっかけは、逓信省の発行した日露戦争の記念絵葉書シリーズにある。兵士の慰問をかねて、国内と戦地とでさかんにやりとりされたが、その発行数は、多いものでは一枚につき数十万部、最も多いものは百万部におよんでいる。

④　絵画作品とその記録

戦争の直後より、とりわけ従軍画家の出現と戦争画の作成を望む声が多く、戦争画を取り扱う展覧会も少なくない数が開催されている。恤兵を目的とした展覧会の開催も少なくない。

しかし、昭和期において見られるような、政府が主導したり、またメディア･イヴェントとして展開されるような、大規模な戦争美術展は組織だって開催されなかった。多くの戦争画作品は、個人的な依頼を満たすにとどまるか、限られた場に展示されることが多かったようである。数年後に開催される勧業博覧会や文展にも、戦争を主題としたものは多くなく、それらの戦争画のゆくえを今日追うのはきわめて困難である。

たとえばトモエ会という団体は戦争画制

作に意欲的であったが、徐々に画壇から遠ざかったため、その作例もまた追跡しがたいのが現状である。トモエ会は、川村清雄や二世五姓田芳柳らが中心となって結成された洋画団体であるが、当時の洋画壇では、白馬会と太平洋画会に次ぐ第三の位置をしめていた。東城鉦太郎・石原白道など、多くの従軍画家が参加し、また会の中心的存在であった川村清雄・二世五姓田芳柳も戦争画を描いており、戦争との結びつきがきわめて強い。彼らトモエ会の例は、日露戦争の従軍画家と戦争画が忘れられてゆく流れを、典型的に示すものである。

⑤　パノラマ

調査の過程で、上記のメディア以外にも多様な視覚イメージに出会った。なかでも、人気をよんでいた視覚的娯楽施設パノラマは、戦場を疑似体験させる点において、注目すべきものである。

上野と浅草をはじめ、いくつかのパノラマ館では大きな戦闘が題材に選ばれ、その掛け替えが報道されている。従軍画家が参加し、その描写の「真実らしさ」が評価される傾向が見られる。

⑥　写真／錦絵

日々技術革新が行われた写真については、日露戦争の時期にその勢力を拡大している。様々な調査・採集を行っている。一方、開戦直後に一時息をふきかえした錦絵は、しかし衰退の一途をたどった。この両者のコントラストは当時の視覚メディアの趨勢を考察するうえできわめて興味深く、今後の調査を必要とするものである。

(3)　その他の調査事項

①　出版

当時、戦争による出版事情と景気の悪化にもかかわらず、きわめて多様かつ大量の出版が行われている。また、印刷技術の発展にも特筆すべきものがあり、この時期に石版多色刷や写真印刷の利用は拡大している。新聞や画報雑誌は部数を伸ばし、また絵葉書が大流行となって、木版による戦争錦絵の命脈をたつに至った。

②　従軍画家と戦争画の制度

従軍画家は、近代の戦争の視覚イメージを考察する上で重要な存在である。それは、彼らが自らの目で戦争を見ることによって達成される報道と、モニュメンタルな戦争画の作成という、二つの異なった役割を有しているためである。

日露戦争期においては、この二つの役割は双方ともに重要であった。それを示すように、多くの画家が様々な立場で戦地へわたり、観戦しながらそこでの通信を描き送っている。

しかし、こうした活発な活動にもかかわらず、これ以降、戦争画は画壇の主流ではなくなってゆく。それは、従軍画家に対する期待が、「文明国」らしい戦争画の作成を前提としてとなえられることが多く、また同時期の「文明国」にふさわしいとされた「芸術至上主義」の広がりのなかで、「際物」的な活動は世俗に媚びるものとして退けられるようになったためである。

(4)　戦争のイメージ形成をめぐる言説

上記（3）②で述べたとおり、戦争のイメージをめぐっては、主に報道の観点と、戦争画の観点から議論がおこっている。両者の論点はそれぞれ異なるが、共通しているのは、ともに「文明国」の戦争としての日露戦争の表象という点である。

また、戦争画の問題は、戦争文学の問題とともに論じられることも少なくない。こうした議論は、何を写し何を描くべきか、さらには芸術とは何か、という議論と結びついてゆく。

(5)　得られた成果の意義

①　同時代資料の活用

本研究の第一の意義は、従来活用されがたかった多様な同時代資料を発見・分析し、同時代の美術史研究に貢献する点にある。

当時は初の官設美術展覧会である文部省美術展覧会の開設前夜に相当する。多彩な画家・画派が活動し、美術は制度的枠組みをそなえつつあった。しかし、戦時下の活動や戦争とのかかわりには不明な点が多く、その多くは忘れ去られてしまっている。本研究は、この研究状況に対し、作家・画派中心のアプローチではなく、日露戦争を中心にすえたアプローチからの調査によって、画家たちが戦争とどのようにかかわっていたか、また、生み出された戦争のイメージが、この美術制度の形成のなかで、どのように位置づけられていったのかという点について答え、またさらなる考察の手がかりを与えることができた。

②　戦争と視覚文化

本研究の第二の意義は、戦争という事象を前に、作家をふくめた多くの人々が、いかに制作と受容―生産と消費の双方向から参加し活動したかを浮かび上がらせることにある。これは、20 世紀初頭の社会において視覚文化が果たした一つの役割を、戦争という観点からあらためてとらえなおすことに他ならない。この観点は、当時の美術や視覚文化をめぐる状況に対する理解を、より重層的なものとなることを意図したものである。

ゆえに、本研究は、日露戦争の視覚イメー

ジについての包括的調査を達成するのみならず、20 世紀初頭の視覚文化と社会をめぐる状況に関して、多少なりとも新しい知見を提供できたと考える。

(6) 今後の展望

本研究の成果により、日露戦争期における視覚イメージの概要をとらえることができた。しかし、写真や錦絵など、いまだ調査の及んでいない部分も残っており、また視覚イメージの様々なあり方に触れるにつれ、それらをより広い〈表象〉というパースペクティブからとらえなおす必要も実感している。

① 錦絵と写真

本研究を通じ、新たな課題が浮かび上がってきた。それは、日露戦争の時期にあって、衰微しいわば敗れていったメディア――錦絵と、あらゆるメディアを席巻するかのように興隆していったメディア――写真である。錦絵と写真とは、「日露戦争期における視覚イメージ研究」では主要な調査の対象とはしていなかったが、調査を進めるうちにおのずとその重要性が理解されるようになっていった。

両者の趨勢はきわめて対照的であり、かつこの日露戦争の時期に特有で、他の時代には見られない。ゆえに、この交代劇のなかに、日露戦争の表象を時代に即して考察するための重要な視点が含まれていると考えるにいたった。

そこで代表者は、2009 年度からの 2 年間の研究課題として、「日露戦争の錦絵と写真―１９００年代における戦争の表象―」（科学研究費補助金（研究代表者）・若手研究（B）・課題番号 21720058）を設定している。これは、錦絵と写真に着目して、双方の制作／製作と受容／消費の具体的な様相を調査・考察するものである。この両者を対象とするのは、近世から生き長らえていた錦絵と、近代的背景のもとに力を伸ばしてゆく写真、この二つのメディアによる戦争の表象が交代してゆく様をとらえるためである。

② 表象としての日露戦争

本研究で行った日露戦争期の視覚イメージ研究の成果と、上記の錦絵と写真についての考察を行いながら、今後は「表象としての日露戦争」を課題としてゆく予定である。

これまでの調査・考察によってい明らかになったのは、日露戦争が、まさに「表象」としてたちあらわれてゆく過程であった。すなわち、戦争の実態を反映しつつも、そこにかかわったあらゆる立場、あらゆる階層の人々のまなざしを通じて、戦争は表象され、その表象を通じて戦争はあらためて可視化―認識されていったのである。

表象というキーワードで考察を行うことは、視覚イメージに限らず、より広い媒体や行為そのものを考察の対象となる。たとえば、日露戦争時には従軍記者や観戦武官たちのために海軍によってしたてられた「満州丸」という観戦船が存在した。そこでは果して何がまなざされたのか、またそのまなざしはどのように表現されてゆくのか、といった点についての分析を計画している。

本研究で得られた成果は、研究上の意義に加え、代表者の研究の範囲を、美術史から、より広い表象の歴史としての文化史へと開く展望を与えたと言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 向後恵里子「東城鉦太郎―日露戦争の画家」『近代画説』17、査読有、2008 年、74 - 101 頁。
② 向後恵里子「東城鉦太郎と日露戦争について」『鹿島美術研究年報』第 24 号別冊、査読無、2007 年、408-421 頁。

〔学会発表〕（計２件）

① 向後恵里子「日露戦争の従軍画家とその活動」美術史学会第 62 回全国大会（2009 年 5 月 22 日、京都大学）
② 向後恵里子「東城鉦太郎の画業―日露戦争を中心に」明治美術学会総会（2007 年 12 月 8 日、早稲田大学）

６．研究組織
(1)研究代表者

向後　恵里子　（KOGO　ERIKO）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手
研究者番号：80454015